齋藤修一郎が明治 19 年～21 年に読んだ英書の発見

川瀬健一

齋藤修一郎（1855－1910）は、明治 19 年（1886）秋に、外務大臣秘書官・翻訳局長兼総務局政務課長・兼条約改正会議書記官長を退き、ベルリンの日本公使館参事官としてベルリンに赴任し、明治 21 年（1888）秋に井上馨から「農商務大臣になったから秘書官として戻ってこい」と命じられて帰国するまで約 3 年の月日をヨーロッパで過ごした。

2013 年 1 月。この時期の彼が読んでいたに違いない英書が多数見つかった。

明治 30 年（1897）に当時の京大総長が「開かれた図書館」を作りたいとの意向で多くの著名人に本の寄贈を依頼し、齋藤修一郎がこれに応えて京都大学の付属図書館に多数寄贈しことが、ネット上の付属図書館の歴史からわかり、図書館に問い合わせたところ判明したもの。詳しく調査したところ、彼が寄贈した本は 242 冊。今でもその大半の 172 冊が所蔵されていることがわかった。そしてその中に現存 115 冊、失われたもの 9 冊、合計 124 冊の洋書が含まれており、その内の 95 冊（現存 88 冊・失われたもの 7 冊）が英書で、その大部分が彼がベルリンに赴任していた時期にヨーロッパで出版された本であった（仏書も同じ）。この洋書の目録を読んでみると、ほとんどがヨーロッパの強国の歴史の本であり、国々の政治・社会・経済、そして主な政治家の業績などにかかわる研究書であった。なお残りの和書にも興味深い本がいろいろあった。日本史の本に混じり、「朝鮮国史」や様々な人の手になる朝鮮紀行文が含まれていたことは、彼が外交に携わるにあたって当該の国の歴史や現状をじっくり学んで事にあたった可能性を示唆している。さらに今は行方不明だが、井上哲次郎の「英華字典」明治 16 年版が入っていたことも興味深い。

ベルリン赴任時代の齋藤修一郎が何をしていたかは、従来は不明であった。彼の帰国を報じた新聞（朝日）記事が、「西欧情勢を研究」と報じていたが、その内容は不明であった。また齋藤の友人の原敬の日記に、齋藤がしばしばベルリンから出てきて、パリの日本公使館で一等書記官をしていた原のもとに立ち寄ったり、ベルギーのブリュッセルやイギリスのロンドンに出かけたことが記されており、齋藤が駐独公使であった西園寺公望の供をして、各国を回っていたらしいことは分かっていたが、その目的も不明であった。

この点を少し明らかにしたのが、東欧史研究者の稲野強が、ハンガリーのブダペストで発見した修一郎の手紙 2 通である（稲野強「ベルリンからの手紙・1888 年―失意の外務官僚　齋藤修一郎小伝―」1994 年「群馬県立女子大学研究紀要 15」所収による）。

齋藤修一郎は明治 20 年（1888）6 月にブタペストの旅行家・学者であるヴァームベーリ（1832－1911）に手紙を出し、「アジアへのロシアの進出に強い関心があるが、この手のことを学ぶのに必要な本を紹介してほしい。英書でも仏書でもかまわない」と依頼していた。そしてヴァームベーリがこの要請にこたえたのであろう、齋藤の二通目の手紙は「御教示いただいた書物を、ロンドンのエージェントに購入させている」との内容であり、参考書

籍を教えていただいたことへのお礼であった。ヴァームベーリは中央アジアを広く旅行し、この地の歴史を広く学ぶとともに、この地域でのロシアとイギリスの利害がぶつかる状況を実際に見聞して、これらを深く考察して本にした人物である。この 2 通の手紙は、齋藤のベルリン時代の関心がロシアのアジア進出にあったことを示していた。

今回見つけた齋藤が京大図書館に寄贈した英書には、ヴァームベーリの著書三冊が含まれ、これ以外にもヴァームベーリが教えてくれた参考書も含まれると思われるが、その内容からして、ベルリン時代の齋藤の関心事がさらに広く、ロシアのアジア進出の情勢を中心として、ヨーロッパの強国の動向を、その歴史や社会経済、政治の在り方も含めて深く考察するものであったことが伺える貴重な資料である。齋藤は、東京の大学南校・南校・第一番中学・開成学校時代の明治 3 年（1870）から 8 年（1875）まで外国人から直接英語で諸学を学び（英語と歴史と化学は、アメリカ人の E.グリフィスから）、明治 8 年から 13 年（1880）までアメリカのボストン大学に留学したことで培った卓越した英語力を駆使し、朝鮮から満州をめぐってヨーロッパ列強、とくにロシアとの利害衝突を抱える日本外交の課題に応えるべく、ベルリンで勉強を続けていたのであろう。

齋藤が寄贈した本はすべて一般人が借り出すことも可能なものである。いつか齋藤が寄贈した本を全部通読して、彼が多くの英書からどのような知識を吸収したのかを確かめてみたいものである。

なおこの新資料発見には、多くの方の御助力を得た。特に私の問い合わせに答え、寄贈本リストを現在の所蔵リストから作成し、図書原簿閲覧の便宜を図ってくださった付属図書館の梶谷氏、そしてすでに廃棄されたり行方不明となった寄贈本を探すために、図書館の図書原簿やヴァームベーリの著書 3 冊を閲覧し写真撮影してくれた京大大学院医学研究科の小泉昭夫教授（環境衛生学）には大いに御世話になった。この小泉氏は私の遠い親戚である。齋藤修一郎の母方の祖母の妹が、小泉氏の直接の先祖。二人は越前府中（現福井県越前市）本多家家中の医師・滝家の娘で、妹サヘは府中の医師石渡家に嫁し、その息子の慎一が近在の農家高橋家に養子に入り、その次女ぶんが近在の農家小泉家に嫁した。小泉昭夫氏はこのぶんの玄孫。一方姉のヒデは近隣の鯖江藩の町奉行藤田氏に嫁いだ。この娘フミが府中の医師齋藤策順に嫁ぎ生まれたのが齋藤修一郎であり、私は齋藤修一郎の娘の孫。小泉氏が 2015 年の医学会総会での医学史の展示ために越前国の幕末の医師の事績を調べていて、修一郎の父策順（彼は越前国に種痘を広めた医師の一人）について記した私の個人サイトに、2012 年 4 月にたどりついたのが縁である。

人の縁というものは不思議なつながり方をするものだ。

（注：この会報原稿を送った後、ヴァームベーリの著書への書き込みは齋藤のものでないことが判明した。先にも記した京大の小泉氏が詳細かつ鮮明な英文・和文の書き込みの写真を撮って送ってくれ、それを齋藤の自筆の手紙や英文自伝やサインの書体と比較し別人だと確認した。）

（「日本英学史学会報」No. 131　September 1, 2013 掲載）